

キーパーズで行なう、遺品の合同供養。布団、人形から仏壇まで、さまざまなものを供養している



孤独死が最も多いのは六〇歳前後の「独居中年」

孤独死の多くは、かくも悲惨であるうえ、遺族、近隣住民、家主などにも多くの迷惑をかける。だが、孤独死は他人事ではまったくない。子どもが独立した後、伴侶に先立たれてしまえば、いつ一人暮らしになってもおかしくはないのだ。

実際、独居老人の数は年々増加し、すでに〇五年には四〇〇万人を超えている（九一ゾ上のグラフ）。特に注目すべきは、独居老人の

多くが女性であるが、その一方で、孤独死の多くは男性であることだ（九一ゾ下のグラフ）。

〇六年の独居老人は四一〇万二〇〇〇人。そのうち、女性が三〇六万八〇〇〇人を占め、男性は一〇三万四〇〇〇人と女性の三分の一にすぎない。だが、東京都監察医務院の統計によれば、東京三三区で同年に孤独死した四八九六人のうち、女性が一五七人だったのに対し、男性は三三七九人と倍以上に上る。

そして、もう一つ注目すべきは、孤独死の可能性が最も高いのは、独居老人ではなく、「独居中年」である点である。

吉田社長によれば、「当社で扱う変死現場のうち、特に死後、何日もたって発見されるケースの多くは団塊世代前後の人たち」という。

実際、〇六年に東京三三区内で孤独死した人を年齢別に見ると、男性で最も多いのは六〇〜六四歳で五二九人、次いで五五〜五九歳で五〇七人である（九一ゾ上真ん中のグラフ）。



遺品整理前（上）には足の踏み場もなかった部屋だが、作業後（下）には何一つ残らず、きれいななる

「高齢者であれば、周囲の人たちが、万が一の事態を心配し、頻繁に連絡し合ったりもする。だが、団塊世代はまだまだ若く、周囲も気にとめない」（吉田社長）のが、孤独死の多い理由の一つだろう。

入 居者の死後、遺体が腐乱して発見された場合、その事実を、貸し手は次の入居者に説明する必要がある。仮に説明を怠れば、「民法上の瑕疵担保責任を問われる可能性が高い」（大手不動産会社）。

そのため、事故物件となったことへの補償費用をめぐり、保証人や遺族に迷惑が及ぶ可能性がある。また、変死を知ったマンションの住民たちが引越してしまえば、家主の損害も大きい。

自分の死後のことはいえ、腐

って死臭を放ち、ウジと蠅がたかる遺体になることを想像するのは気持ちのよいものではない。まして、遺族や近隣住民にまで迷惑をかける死に方は避けたいところだ。一人暮らしの人が、こうした最悪の事態を避けるには、死後、早期に発見される環境をつくることだ。自治体のなかには、孤独死を減らすために高齢者の安否確認などの取り組みを始めたところもあるが、まだごく一部にすぎない。

特に孤独死が最も多い五十〜六十代については、近隣住民とのコミュニケーション、親族や友人と頻繁に連絡を取り合う環境をつくることで自衛するしか術はない。キーパーズ

<http://www.keepers.jp>